

職業奉仕 その原理と実践 3

職業奉仕理念が確定したことを受けて、この理念を具体化するために、1913年のバッファロー大会で特別な道德律を作るためのアンケートを出すことが決定しました。アイオワ州シューシティ・クラブのロバート・ハントが中心になって、その具体的事項を全国のロータリアンから募集したところ、数百にもものぼる提案が集まりました。しかし、彼は個人的事情のため、その役割を同じクラブの会員であるパーキンスに譲りました。パーキンスはシューシティ・クラブの友人数名を委員に任命しました。その中には、かつてシェルドン・ビジネス・スクールの学生であったジョン・ナトソンも含まれていました。

彼らは、それを 500 語に文章にまとめあげ、1914年のヒューストン大会に提出しましたが、この大会では、この道德律をすべてのロータリアンに送って、研究することが決まり、1915年のサンフランシスコ大会においてほぼ原文のまま採択されて、公式な道德律となりました。

1 自分の職業は価値あるものであり、社会に奉仕する絶好の機会を与えられたものと考え、これは綱領上の職業奉仕の項目と一致します。

2 自己改善を図り、実力を培い、奉仕を広げること。それによって、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーの基本原則を実証すること。

ロータリーの例会を通じて、お互いに職業上の発想の交換をしながら、他人の事業上の取り組み方を参考にして自己改善を図ります。もしも自分の職業態度に問題があれば、それを正さなければなりません。

その結果、経営能力が高まって、**He profits most who serves best** の成果を、自分の事業所で実証することができるのです。

3 自分は企業経営者であるが故、成功したいという大志を抱いていることを自覚すること。しかし、自分は道德を重んじる人間であり、最高の正義と道德に基づかない成功は、まったく望まないことを自覚すること。

経営者として、自分の事業を成功させようとするのは当然のことですが、正義と道德に基づかない事業の発展を望んではなりません。

4 自分の商品、自分のサービス、自分のアイデアを金銭と交換することは、すべての関係者がその交換によって利益を受ける場合に限り、合法的かつ道德的であると考え、

商取引の原点は等価による物々交換であり、それが貨幣を介した交換に変わった時点で、利益という概念が入ったわけです。従って、買った者も売った者も、共に満足しなければ商売は成立しないはずで

5 自分が従事している職業の倫理基準を高めるために最善を尽くすこと。そして、自分の仕事のやり方が、賢明であり、利益をもたらすものであり、自分の実例に倣うことが幸福をもたらすことを、他の同業者に悟らせること。

6 自分の同業者よりも同等またはそれに優る完全なサービスをすることを心がけて、事業を行うこと。やり方に疑いがある場合は、負担や義務の厳密な範囲を越えて、サービスを付け加えること。自分が提供した商品や技術は、商法上の期限や民法上の期限を越えて、一生責任を持ちなさいということで、現在の製造物責任法すなわちPL法を先取りしたものです。しかし、これを忠実に守れば、会社は潰れる可能性があるという反発が出て、その後この道德律が廃止される一つの原因になりました。

7 専門職種または企業経営者の最も大きい財産の一つこそ、友人であり、友情を通じて得られたものこそ、卓越した倫理にかなった正当なものであることを理解すること。真の友人はお互いに何も要求するものではない。利益のために友人関係の信頼を濫用することは、ロータリーの精神に相容れず、道德律を冒瀆するものであると考えること。自分が利益を得るために、友人との信頼関係を利用してはなりません。

8 社会秩序の上で、他の人たちが絶対に否定するような機会を不正に利用することによって、合法的または非道徳的な個人的成功を確保することを考えてはならない。物質的成功を達成するために、他の人たちが道徳的に疑わしいという理由から採らないような、有利な機会を利用しないこと。

9 道義的に疑義のあるような条件や、機会を利用した取引はしてはなりません。横流しや不正ルートを利用した取引は、ロータリーの職業奉仕とは程遠い行為と言わざるを得ません。

10 私は人間社会の他のすべての人以上に、同僚であるロータリアンに義務を負うべきではない。ロータリーの神髄は競争ではなくて協力にあるからである。ロータリーのような機関は、決して狭い視野を持ってはならず、人権はロータリークラブのみに限定されるものではなく、人類そのものとして深く広く存在するものであることを、ロータリアンは断言する。さらに、ロータリーは、これらの高い目標に向かって、すべての人やすべての組織を教育するために、存在するのである。

ロータリアンだという理由で特別な配慮をしてはならないし、期待してはなりません。ロータリーの創立当初は、物質的相互扶助として、これが行われていましたが、1913年を以って決別したはずで

11 最後に、「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」という黄金律の普遍性を信

じ、我々が、すべての人にこの地球上の天然資源を機会均等に分け与えられた時に、社会が最もよく保たれることを主張するものである。

これが、マタイ伝からの引用だという理由で、この道德律を廃止しようという原因の一つになりましたが、これはキリスト教に特有な教義ではなく、同じ意味の教えが論語にも、イスラム教にも、仏教にも書かれています。全ての哲学的な教えの中には、この言葉が入っており、世界共通の教えとも言えます。シェルドンも、「自分が人からしてもらいたいなと思っていることを、先ず人にしてあげなさい」という教義と *He profits most who serves best* は全く同義語であると述べています。

次のような倫理基準を定めた文章があります。

- 1 職業に対する不断の努力が正しく賞賛されるように心がけ、自己の職業の尊さを確信すること。
- 2 事業を成功させて、適正な報酬や利益は受けるべきであるが、自己の立場を不当に利用したり、人に疑われる行いをして自尊心を傷つけてまでも利益や成功を求めないこと。
- 3 事業を遂行するにあたっては、他人の事業を妨害しないように心がけ、顧客や取引先に誠実であり、自己にも忠実であること
- 4 世人に対する自己の立場や行いに疑いが生じたときは、世人の立場に立って解決にあたること
- 5 真の友情は損得の上に築かれるものでなく、心と心の触れ合いによるものであることを自覚し、手段としてではなく目的として友情をもつこと
- 6 国家および地域社会に対する公民の義務を忘れず、かわらぬ忠誠を言動にあらわし、すすんで時間と労力と資力をささげること
- 7 不幸な人には同情を、弱い人には助力を、貧しい人には私財を惜しまないこと
- 8 批評は謙虚に、賞賛は惜しみなく、建設を旨として破壊をさけること

これはライオンズ道德綱領と呼ばれるものです。ロータリーが職業奉仕の理念を持っている唯一の奉仕クラブであると考えるのは身の程知らずの軽薄な考え方であって、ライオンズもこのような立派な倫理基準を持っていることを忘れてはなりません。ただし、ロータリーの職業奉仕理念は、その受益者がロータリアンであり、職業奉仕を実践した結果得られるものが道德基準であることです。従って、ロータリアンが受益者になる職業奉仕の実践を怠って、道德基準そのものが職業奉仕であると誤解すると、ロータリーとライオンズの区別がつかなくなるのです。

1929 年から始まった世界大恐慌の時期に、ロータリアンがなしとげた大きな業績の一つに、四つの

テストの制定があります。1931年、包装済食品戸別訪問販売の職業分類でシカゴ・クラブの会員であったハーバート・テーラーHerbert Taylorは、不況のあおりを受けて、莫大な借金を抱え倒産の危機に瀕していたクラブ・アルミニウム社の経営を引き受けることになりました。もしも、会社の再建に失敗すれば、250人の従業員が仕事を失うことになります。

彼はこの状況から脱出して、会社を再建するためには、道徳的、倫理的な指標がどうしても必要だと考えました。従業員が正しい考え方を持って正しい行動をすれば、会社全体の信用が高まるに違いありません。社員全体が簡単に憶えられて、自分を取り巻く全ての人たちに対して、考えたり、言ったり、行動したりするときに応用できる、道徳的な指標が必要であることに気づいたのです。社長室の机の前で頭をかかえながら、思い浮かんだ24語の言葉を書き留めたのがこの四つのテストです。

この四つのテストは倒産の危機に瀕した会社を立ち直らせるための純然たる経営上の指針であることに留意しなければなりません。四つのテストは、学校や駅に張り出したりして日常生活に適用するものではありません。その使用を事業上の取引に限定すると共に、邦訳や解釈を厳密にする必要があります。

Four-way test 四つのテスト

「事業を繁栄に導くための四通りの基準」ならば、当然 Four-way tests と複数形になるはずですが、これが単数形であるのは、事業を繁栄に導くためには、四通りの基準を一つずつクリアすればいいのではなく、四つ纏めたものを一つの基準として、そのすべてをクリアしなければならぬことを意味します。ロータリーの綱領が Object of Rotary と単数形であり、四つの項目が渾然一体となって、一つの綱領を形作っているのと同様です。

Is it the truth? 真実かどうか

商取引において、商品の品質、納期、契約条件などに嘘偽りがないかどうかは、非常に大切な基準です。真実というのは、「80%の真実」という言葉が示すように、人間の心を通じたアナログ的な判定であるのに対して、事実とはその事実があったのか、無かったのかの二者択一を迫るデジタル的判定ですから、ここでは「事実かどうか」「嘘偽りがないかどうか」という言葉を用いるべきでしょう。

Is it fair to all concerned? みんなに公平か

fair と all concerned という言葉の翻訳に問題があります。fair は公平ではなく公正と訳すべきでしょう。公平とは平等分配を意味するので、例え贈収賄で得た unfair 不正なお金でも平等に分ければ、そ

れでよいことになります。all concerned は all だけが訳されており、肝心の concerned が省略されています。冒頭に述べたように四つのテストは

「商取引」の基準として定めた文章ですから、この concerned (関わりのある人、関係する人) は「取引先」のことを意味することは明白です。従ってこのフレーズは「すべての取引先に対して公正かどうか」ということを意味します。

Will it build goodwill and better friendship? 好意と友情を深めるか
goodwill は単なる好意とか善意を表す言葉ではなく、商売上の信用とか評判を表すと共に、店ののれんや取引先を表します。すなわち、その商取引が店の信用を高めると同時に、よりよい人間関係を築き上げて、取引先を増やすかどうかを問うものです。「信用を高め、取引先をふやすかどうか」と訳すべきです。

Will it be beneficial to all concerned? みんなのためになるかどうか
Benefit は「儲け」そのものを表す言葉です。商取引において適正な利潤を追求することは当然なことであり、決して恥ずべきことではありません。ただし、売り手だけが儲かった、また買い手だけが儲かったのでは公正な取引とは言えません。その商取引によって、すべての取引先が適正な利潤を得るかどうかの問題なのです。「すべての取引先に利益をもたらすかどうか」と訳すべきでしょう。

私たちのまわりではいろいろなことが起こっています。私たちは自分に貸与された職業分類の代表者としてロータリークラブに属している関係上、最も大きな関心事は事業上起こる諸問題ではないかと思えます。

企業の不祥事がマスコミに報道されるたびに、どうかロータリアンでないようにと祈りながら全国会員名簿を検索するのは私だけではないと思えます。そして残念なことにはその名前を全国会員名簿に発見することも多くなりました。

すでに述べた通り、つい先日も、賞味期限や原材料を改ざんしたミルク・菓子・食肉会社の虚偽表示や隠蔽事件がマスコミを賑わしました。

事業主だけが利益を独占するのではなく、利益はすべての関係者に適正に再配分しなければなりません。

従業員の技能を適正に評価し、公正な従業員対策をしなければなりません。

これらの企業犯罪が表面化するの、つもり積もった従業員の不満が爆発して内部告発となり、会社の屋台骨を揺るがす事態に発展することを忘れてはなりません。

社会に奉仕するために職業が存在することを忘れた人たちが虚業に群がって、自己の利益を追求するために株式の不正取引や会社乗っ取りにうつつを抜かします。会社を立ち直らせるための M&A は立派な実業ですが、自らの利益を追求するための M&A が虚業であることは、いまさらスチール・パートナーズに対する東京高裁の判断を仰がなくても、100 年も前からロータリーの職業奉仕哲学に明記されている原則なのです。

常に新しいサービスや商品を開発する努力も必要です。これらの努力が会社を発展させるための職業奉仕活動の実践なのです。

談合、贈収賄といった不公正競争や公取法違反の事件も後を絶ちません。業界の慣習だから、自分の会社だけでは是正できないと言い訳をする人もいます。しかし、ロータリアンは業界に派遣された大使として、ロータリーの提唱する職業奉仕理念をその業界に広める義務があるのですから、敢えてその困難に立ち向かわなければなりません。最も大切なことは、構造的な犯罪とも言われる不公正競争を是正することです。贈収賄や談合を業界の慣習として是認するのではなく、これを恥ずべき犯罪として肅清する勇気と努力が必要です。

ロータリーは自由主義経済を前提として生まれた組織です。自分の会社で作った素晴らしい製品を、それを必要とするすべての顧客に届けるのが原則であり、その意味からは、日本ではごく当たり前になっている系列化とか、一社に直属した下請制度は、ロータリーには馴染みません。親会社の指示によって、生産ラインを増強しても、その製品を必ず親会社が引き取ってくれるという保障はありません。一社に頼らず、どこの会社にも納入できる素晴らしい製品を常に開発することが、企業を生き残らせる大きな要素なのです。一世を風靡した「看板方式」も、自社で作った部品を能率よく製造ラインに届けるのならばともかく、下請け会社のリスクで行うのならば、ロータリーの職業奉仕とはかけ離れた行為と言わざるを得ません。

現在、約束手形を使っているのは、世界中で日本と韓国だけで、それ以外の国では使っておりません。この約束手形は零細な下請業者を泣かす大きな原因になります。弱い業者ほど、高い割引料を払って現金化しなければなりません。支払元が倒産でもすれば、ただの紙切れにしか過ぎません。ロータリアンの取引は双方が満足する取引であることが原則ですから、相手にリスクを負わせる手形決済はロータリーには馴染みません。

事業を発展していくためには、世間から受け入れられる経営態度が必要です。業界の代表であるロー

ロータリアンは、同業者を競争者としてライバル視するのではなく、自分たちの仲間として協力しながら、業界全体の繁栄を図る必要があるのです。

ロータリアンがその職業分類の代表として業界に派遣されている以上、業界における職業奉仕の実践もロータリアンの使命といえます。このような不祥事を自らが起こさず、自らの属する業界からも起こさないようにすること、すなわち職業倫理高揚が、職業奉仕活動実践の側面であることを忘れてはなりません

職業を持っているロータリアンは、自らの職業を通じて奉仕活動の実践をすることができます。しかし、ロータリークラブは職業を持っていませんから、直接職業奉仕活動を実践することは不可能です。しかし、職業奉仕とは何かをロータリアンに教えることは可能です。クラブの職業奉仕委員会が中心になって、正しい職業奉仕の理念を会員に周知徹底してください。

また、クラブ内外のロータリアンが行っている職業奉仕活動の事例を集めたり、各種の職業情報の詳細を伝えることも有意義な活動の一つです。

不祥事を起こす本人が悪いのは当然ですが、そのような人を出したクラブにも大きな責任があります。クラブの中に真の親睦が存在すれば、またクラブの中にどんなことでも相談できる雰囲気があれば、その不正行為を思い留まらせることが可能であったはずですが、すなわちそのクラブには真の親睦が存在しなかったことを証明しているのです。親睦の存在しない組織では、保身のためにお互いが悪い意味でかばいあい、往々にして悪貨が良貨を駆逐し、腐った林檎がまわりの林檎を腐らせるものです。

ロータリアンは、まず自分の事業の繁栄を考え、次に自分が属する業界全体の繁栄を考え、究極的には地域社会全体の繁栄を図らなければなりません。

日本のロータリアンには優れた技術を持っている零細企業や中小企業のオーナーが沢山います。電子レンジの技術として開発され、結果として携帯電話やコンピューターやステルス戦闘機にまで取り入れられた電磁波吸収塗料、あらゆる物質に可能なメッキ技術、ナノの単位の金属加工技術、こういったものは、全て日本の小さな町工場で開発された技術です。また、目を閉じていても、リンスかシャンプーかが判るように、キャップの形を変えた洗剤メーカーも立派な職業奉仕の実践者です。

ロータリアンはその業種の代表者ですから、ロータリアンだけではなく、地域社会のこういった優れた技術を国際的に紹介したり、仲介する責任を持っているはずですが、WCS の交換プロジェクトのような技術登録バンクを作って、お互いに利用できるようなシステムを作り、クラブ・レベル、地区レベル、世界レベルに広げていくことも、新しい観点からの職業奉仕になるのではないのでしょうか。

若干、本来の職業奉仕からは外れるかも知れませんが、特殊の技能を持った人材を広く内外に紹介することも、地域の産業に大きく寄与する活動です。

最近インターネットを通じた情報が入り乱れています。特に青少年に大きな影響を与えている不良サイトが問題になっています。ロータリアンが経営しているプロバイダーも数多くあると思いますので、これらの人が中心になってこの業界から青少年に悪い影響を与えている不良サイトをなくする運動を進めることも可能だと思います。同様にインターネットを経由して取引される麻薬や銃などの禁制品も、郵便事業に携わるロータリアンの世界的な結びつきを利用して防止することも決して不可能なことではありません。また、ロータリー親睦活動のネットワークを通じて、数々のボランティア活動を同業者に呼びかける活動も必要です。

ロータリアンには受益者のニーズに適応した奉仕活動を実践する責務が課せられています。安全な食品を口にしたいというニーズがあれば、ロータリアンは安全な食品を提供できるように、職業奉仕の実践活動を展開しなければなりません。貧困や疾病から逃れたいというニーズがあれば、ロータリアンはその分野における人道的奉仕活動を実践しなければならないのです。

理念の裏づけのない実践活動を行ったり、奉仕理念の研鑽を怠って、奉仕活動の実践にのみに狂奔するのも困りものですが、もっと始末に負えないのが、理屈だけを弄して、全く奉仕活動の実践には無関心な会員の存在です。ロータリーの綱領は、決議 23-34 は、職業奉仕理念はと、理屈をこねますが、WCS やその他の人道的奉仕活動にまったく参加したことがない人が余りにも多いのが日本の現状です。それも或る程度の年齢で、在籍年数も長い会員に多いようですが、その知識が決して深くないことは、何か事があると決議 23-34 と言いながら、その第 4 条「奉仕するものは行動しなればならない。ロータリー哲学も単に主観的なものであってはならず、それを客観的に行動に表さなければならぬ。」を自ら証明していないことから明らかです。理屈をこねる会員は往々にしてこのような二重人格を持っていることが多いようです。ロータリーの哲学は実践哲学であり、職業奉仕も例外ではないことを忘れてはなりません。

2008 年 2 月 6 日